

自分の知らない用語に出会ったとき、インターネットに親しむ人ならまずウィキペディアを見るだろう。「カミングアウト」という言葉はすでに日常用語になりつつあるが、検索してみると「これまで公にしていなかった自らの出生や病状、性的志向等を表明すること」と出てくる。とすれば、本書はその一文では表現しきれないカミングアウトの内実を、カミングアウトをめぐる子と親、生徒と教師の7組・19通の往復書簡というかたちと、子供からカミングアウトされた親たちの座談会というかたちで記しているといえよう。また、カミングアウトにまつわる物語をコラムとして二つ載せ、さらに自分自身もゲイである編著者がカミングアウトする側/される側への解説を付しており、巻末にはゲイ/レズビアンをめぐる様々なリソース(社会資源)を一覧で紹介している。例えば、手紙の送り手、受け手は次のように記されている

- ・昌志 (27歳) ⇄ 母 (55歳)
- ・伊井義弘 (32歳) ⇄ 母 (58歳)
- ・村上剛志 (29歳) ⇄ 母 (56歳)
- ・勇太 (19歳) ⇄ 母 (59歳)・姉 (33歳)
- ・イトー・ターリ (56歳) ⇄ 母 (82歳)
- ・侑子 (18歳) ⇄ 春野 (44歳)
- ・渡辺圭亮 (25歳) ⇄ 楠原彰 (69歳)

本書はゲイ/レズビアンに関する学術書ではなく、広く一般に読まれるように企画された「啓蒙書」であり、装丁もすっきりしていて大変読みやすい。しかし、「啓蒙書」とは「未知なる世界」への誘いであり、読者の中には未知への旅に必然的に伴う「戸惑い」や「違和感」を感じる人も多くいるだろう。その点、シンプルな文体ながら読み応えある文章である。

ところで、本書はそのような「戸惑い」や「違和感」を積極的に記録しようとしているとも思われる。というのも、カミングアウトとはまさにそのような「戸惑い」や「違和感」を含めたコミュニケーションのプロセスであり、ここに記されているカミングアウトをめぐる往復書簡はその手紙の送り手と受け手の間だけでなく、読者に向けてのカミングアウト、つまり、広く社会に向けられたカミングアウトを意味しているからだ。

カミングアウトが具体的にどのようなものなのかを知ってもらうために、最初の手紙の中から印象的な言葉を断片的に拾ってみよう。断片的に記すことで内容を大いに損なってしまうのだが、詳しくは本書を読んでもらうとして、ここでは雰囲気味わって頂けたらと思う。

昌志：『俺、ゲイやねん』……その言葉を、味もわからへんままぬるくなったサラダの皿にのせてみた。キャベツかレタスが答えてくれるみたいに。」「帰り道、俺は本当に言いたかったことの半分も言えてないことを思った。」

母：「私はひと通り、あなたに関して悪い想像を全部したと思います。」「あの時はただ『母さん、俺、人を殺してしまった』と言われたみたいに、怖くて怖くて、ただ、あなたが壊れて

しまわないように、引き止めるために聞いていた。」「幼いあなたが当然、大人二人を前にして説明などしきれないことを考えると、もっと悪い結果を招いたかもしれません。」「でも私達のなかにもある偏見をまずクリアにしなければならなかったことや、私達両親もまた世の中のゲイに対する不条理に無関心ではいられなくなったことは、少しもあなた自身のせいではありません。」「心配なことはないから、たまには帰っておいで。あなたの家はいつもここにあります。」



後半の座談会では、カミングアウトされた親たちの感想が綴られている。息子がゲイだと聞かされたときには頭が真っ白になり、それでもわが子であると受け入れるのに三カ月くらいの時期を要したこと、あるいは、カミングアウトされてから息子に「ゲイってなに?」と質問を繰り返すも「お母さんになんか分かるわけない」と跳ね返され、カミングアウトすることで抑圧の蓋が取れたものの本人もそこからどうしていいのかわからない時期があったことなど、具体的な状況が赤裸々に語られている。

そして、最後の編著者による解説では、「なぜカミングアウトするのか」という読者が抱くであろう素朴な疑問への回答に始まり、「カミングアウトを考えているあなたへ」「カミングアウトを受けたあなたへ」とそれぞれの立場に対して、本書に登場する人々の意見を織り交ぜながら自身の見解を述べている。特に、カミングアウトすることをめぐってはゲイやレズビアンの間でも意見が分かれていることや、「言わない/言えないのは当然」という時代から「カミングアウトをする/しないを選択する」という時代に切り変わってきたという指摘は傾聴に値する。

最後に、本書を紹介しようと思った私自身の動機について記したい。1点目は、私の学生時代の留学先がカリフォルニア州バークレーというアメリカでもリベラルな土地柄で、ゲイ/レズビアンが多くいることと関係している。つまり、カミングアウトされた側として私自身がある程度当事者である。2点目は、性的マイノリティであることを表明する「カミングアウト」という語り方が、宗教マイノリティとして自分が天理教であると表明することと類似しており、本書にもキリスト者としての当事者が登場するが、語りの内容よりもその形式に共感を覚えるからである。3点目は、本書の中で親子・家族のあいだで勇気をもって真摯に言葉を交わしている姿が、現代社会の家族のあり方に対して非常に示唆的であるから。家族間で言葉を交わすことがいかに困難で大切であるかに気づかされる。以上、平易な文章ながら結果として様々な含みをもった本となっている。ぜひ一読をお勧めしたい。